

バイオリージョナリズムに基礎をおいた上賀茂社家町での環境学習

京都産業大学理学部 正会員 勝矢淳雄

1. はじめに

京都の北に位置する上賀茂地域は、平安京より古く 1300 年以上の伝統ある。上賀茂神社の神官（社家）の屋敷があった明神川沿いの社家町は遅くとも 15 世紀中頃には門前集落として発達したといわれ、少なくなったが今でも社家屋敷群が維持されている。今では全国的にも珍しくなり、昭和 63 年には国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定され、町並みの保存がはかられている。さらに、社家町の周辺地域も平成 9 年に京都市から界わい景観保全地域に指定され、より広く地域の環境保全に力を入れている。

しかし、地域の環境や地域に伝わる文化の保全・継承の努力の一方で、地域住民の高齢化・少子化や住宅の老朽化、相続などの種々の事情から社家屋敷や旧来の住宅が壊されたり、地域の新たな開発にともなう新住民の増加などによる地域共同体の弱体化によって、文化的事象の維持が徐々に失われる危機にあるのも事実である。将来に向かって、上賀茂の文化の保全・継承のためには、従来と同様の形態で親から子へ地域の従来の絆を基に引き継いでいく努力と共に、地域の文化を形のみならずその意義について新住民を含めて地域の住民の理解を新たに深め、さらには社会の認識を深める努力が必要な時期に来ている。

上記のもとに、上賀茂の文化資産について地域住民や社会が再認識するきっかけになることを意図して種々の環境学習などを実施してきた。ここでは、子供たちを対象にした社家町の見学会とその経過を述べる。

2. バイオリージョナリズムとは

バイオリージョナリズム(bioregionalism)とは、「生命地域主義」と訳され、ともすれば離れがちになってしまった地域の自然生態系に根ざした生き方に目を向けるとともに、自然生態系だけでなく地域の文化や歴史をも見直し、再評価することによって、あらためて地域に「住み直し(re-inhabitation)」を求める考え方であり、またその運動のことである。バイオリージョナリズムは住み直しの作業をとおして、そこに住む住民自身が地域との関係を深く自覚し、地域の自然生態系を活かしながら、よりよい生活環境、文化環境を築いていくことを求めている。地域における環境学習活動などはバイオリージョナリズムの精神に基づくべきであり、本活動もそれを強く意識して行っている。

バイオリージョナリズムに基礎をおくことは、地域のことは地域の人たちが主体的に行動し、その行動の中で地域の人たちが地域のことを理解し、住み直しをするのが基本である。しかし、1300 年以上の伝統をもって居住する人達から、新しい居住者までいる上賀茂地域、明治以降の居住者ですら未だに「入り込み人」あるいは「入り人」と見られるこの地域では旧来の複雑な人間関係が未だに続いており、何らかのきっかけなしに地域に新たな行動を期待するのは事実上困難であり、第三者（地域に居住しない者）が関与をして活動を実施し、地域への新たな刺激と行動のきっかけをつくりだすのも意義がある。第三者であるがゆえに可能な活動もあり、また第三者から地域を見ることによって、地元の人たちが気付かないあるいは当然としてみてきた事柄にも新たな価値を見出しうる場合もある。そこに、第三者が地域の活動に関与する意義がある。

3. 地域の状況

安永年間（1772～81）には上賀茂地域に 148 戸の社家屋敷があったが、現在残されているのは 20 数戸で、そのうち昔の面影をある程度残しているのは 10 数戸である。4 戸は京都市の指定（あるいは登録）文化財として保存にも配慮されている。伝建地区内の 7 戸以外の他の社家屋敷は特別の保存対策はなされていない。ところが、社家町界隈に居住している人達も何が社家屋敷の特徴であるかなどについて必ずしも詳しいわけではなく、まして子供たちはほとんど理解していないのが現状である。実際に居住されているので、外から

キーワード：バイオリージョナリズム、上賀茂、社家町、地域連携、環境学習、環境教育

連絡先：603-8555 京都市北区上賀茂本山 36 Tel.075-705-1637 Fax.075-705-1640

見る以外社家屋敷に入ったこともないのは当然ではある。地域の人達の中には、子供たちが土堀に落書きをする、魚取りで石積を緩めるなどで、子供たちを地域の保全のために排除する傾向もあった。子供たちが小さい頃から社家町に良い思い出を持ち、愛着を感じる町づくりが大切である。形骸化した町並みを残すのが地域の保全ではなく、地域の人々の中で活きた町でこそ本来の意義ある町並み保存である。

住宅と農家が主で、観光を商売としているところはほとんどないため、観光客など他所の人たちが地域に来ることに根強い拒否反応があり、伝建地区では「ここは何もしないところ」との申し合わせもある。

4．社家屋敷の見学会の経過

1)平成13年：5戸の社家の方の協力は得られたが、子供たちを集めるのが困難であった。小学校に持ちかけたが、子供たちの自由研究の「上賀茂探検クラブ」は希望がなく成立しなかったということで、関係は切れてしまった。地元で知られた人が世話をしている上賀茂黎明会にお願いし、対象を子供とその保護者とした。条件に合わない大人のみ参加もあり、小・中学生9名と保護者・関係者15名の合計24名となった。子供たちを主な対象としたのは、地域の根強い反発に配慮して子供たちの教育とすることであれば受け入れてもらいやすいと判断したためであった。見学会そのものは参加者に好評であったが、ある方からは大人が多かったことについて約束が違うと強い叱責も受けることとなった。また、地域の方にも不評であり、「ここは何もしないところ。余計なことをするな」との抗議も受けることとなった。これに対し、将来の上賀茂を守ってくれる子供たちを地域が今から育てなければならないこと、そうでなければ上賀茂の将来はないこと、見学させてもらった家の土堀に落書きをする子供はいないなどを粘り強く説得した。

2)平成14年：子供たちへのよりよい伝達方法をつくる事が重要であるので、上賀茂自治連合会長に相談し、上鴨少年補導委員会を紹介してもらい、小学校にある連絡ボックスを通じて参加者を募った。連絡窓口は、やはり上賀茂黎明会にお願いした。小学生7名、保護者など17名、関係者5名の合わせて29名となった。人づてに伝わるうちに条件に合わない大人が申し込んできたが、近隣関係などの上で断り難い状況にあった。関係者以外の大人の参加をお断りする必要が生じてきた。地域からは特に何も反応はなかったが、決して喜ばれている状況とは感じられなかった。

3)平成15年：毎年、商業新聞にも記事にしてもらい地域への広報にも努めたこともあり、上賀茂黎明会を通じて上賀茂探検クラブと一緒に見学会をやらせてほしいとの申し入れがあった。従来の経過から保護者の参加は断り、子供の範囲は小学生から中学生までとした。上賀茂探検クラブが呼びかけたので子供たち17名、探検クラブの世話をする保護者と関係者の11名の合計28名となった。過去のアンケートの結果から時間が長いとの反応が子供たちからあったので2つのコースをつくり実施した。探検クラブとの連携ができたことで、名実ともの子供のための見学会になった。この見学会を実施した後、クラブに参加する子供たちが増えたということで、アンケート結果だけでなく子供たちも喜んでいることがわかった。地域の雰囲気も種々の他の活動の影響もあったと思われるが、好意的な雰囲気になってきた。趣旨と実態が一致してきたことにもよると思うが、かつて怒られた方も良いことだからどんどんやってくださいと言われるようになった。

4)平成16年：活動を上賀茂探検クラブに移行させるため、前日に勉強会を実地に行い、当日は探検クラブの保護者の方に説明もお願いした。子供たち20名、大人10名で、2班にわかれ、それぞれのコースを見学した。安定した開催が可能となったので、平成17年からは社家への依頼なども含め上賀茂探検クラブの行事として実施することとし、大学関係者は説明冊子の作成と当日の付き添いのみとすることとなった。

5．おわりに

この環境学習については、地域に定着させるのに5年かかった。その間、種々の活動を通じて地域の方々との信頼関係を築いてきたこと、良い協力者が得られたことが成功できた理由である。地域のことに貢献しながら研究も進めていることへの理解が得られだした結果といえる。現在、地域貢献7～8割、研究2～3割程度である。第三者（研究者）として地域を利用しているのではなく、地域のために活動してくれているという信頼を得るためには、この程度の比率になるのではないだろうか。